

國學院大學學術情報リポジトリ

中根鳳河『論語徴渙』小考：
江戸期『論語』訓蒙書の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴崎, 一孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001622

中根鳳河『論語徴渙』小考

—江戸期『論語』訓蒙書の研究—

A Study of *Rongo-Choukan* by NAKANE Houka:
Enlightening research of *Rongo* in the Edo Period

柴崎一孝

キーワード：論語徴渙 中根鳳河 江戸漢学 荻生徂徠 論語徴
关键词：论语徴渙 中根凤河 江戸汉学 荻生徂徠 论语徴

要旨

本稿は「『論語』訓蒙書」の対象・特徴・評価を検討する一端として、中根鳳河『論語徴渙』を取り上げ、本書の実態及び価値を検討した。「『論語』訓蒙書」に関しては、「『論語』初学者を含む、講学を試みる層を対象とする著作」と、ひとまず定義した。以下、本稿において述べた事柄を確認する。

第一に、対象読者層と板行目的である。対象読者層は「幼學之士」、板行目的は、『論語徴』の理解の一助のためである。

第二に、特徴である。『論語徴渙』の体裁、「一」（堅棒）の附し方やルビの有無、朱熹『論語集注』などの別説は掲出しない態度などの特徴より、初学者に対する訓蒙的配慮が看取された。なお、石本道明氏の分類に従えば、「I類 獨習参考書《(a) 初学者を対象とするもの》」に該当する。

しかし、『論語徴』の性質、『論語徴渙』との関係や「気質不変化」論を加味すると、『論語徴渙』は、第一義的には『論語徴』に残された問題である引用された古代文献の典拠の不確かさを解決し補強した著作である。

したがって、『論語徴渙』は、第一義的には『論語徴』の問題を解決し補強した著作である。その一方で、「幼學之士」を対象とする訓蒙書の側面も備えた著作である。

摘要

本論文の目的は対“《论语》启蒙书”的阅读对象，书本特征，书本价值进行分析探讨。以中根凤河所著《论语徴渙》为例，探讨研究此书的实际情况及书本价值。首先，“《论语》启蒙书”是指“面向《论语》初学者及初级解说者的著作”。以下是本文中所要论述的观点。

第一，本书的目标读者及刊行目的。本书的目标读者为“幼学之士”。本书的刊行目的是为了协助读者更好的理解《论语徴》所述内容。

第二，本书的特征。根据《论语徴渙》的体裁，“一”（坚棒）的添附方式和是否有注解等方面，以及没有记载朱熹《论语集注》等其他理论的特征，可以看出此书所着重考

虑的是对初学者的启蒙。所以，根据石本道明氏的分类，此书应当属于“Ⅰ类 独习参考书《(a) 面向初学者的读物》”的归类。

此外，对《论语徵》的性质、与《论语徵渙》之间的关系、以及“气质不变化”论等进行仔细探讨后，会发现《论语徵渙》的第一要义是补充解释《论语徵》中残留的问题。即判明《论语徵》中引用的古代文献的出处。

因此，可以说《论语徵渙》这部书的第一任务是解决和完善《论语徵》中的问题与不足。另外本书还是一本面向“幼学之士”的一本启蒙类著作。

1、前言

江戸期において『論語』の需要は高まり、『論語』に関する注釈書、字引などの数多の著作が成された。特に、荻生徂徠『論語徵』は独創的解釈によって頂点に立つと目される。ただし、頂点とする著作があるならば、その書の理解と普及を支えた数多の著作もまた存在するはずである。

本研究では、左記のような「『論語』初学者を含む、講学を試みる層を対象とする著作」を「『論語』訓蒙書」と、ひとまず定義する。例えば、『論語徵』には、理解と普及を目的とした『論語徵渙』がある。しかし、未だに「『論語』訓蒙書」の観点での『論語徵渙』に関する先行研究は少ない。

そこで本稿では、「『論語』訓蒙書」の対象・特徴・評価を検討する一端として、『論語徵渙』を取り上げ、本書の実態及び価値を検討する⁽¹⁾。

なお、本稿は國學院大學大学院特定課題研究「江戸期『論語』訓蒙書の研究」及び日本學術振興会、科学研究費(C)領域番号19K00061「江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究」の研究成果の一部である。

2、先行研究概観

日中における徂徠学に関する主要な研究成果の一つに、高山大毅氏「二一世紀の徂徠学」⁽²⁾がある。本論文では、研究動向がまとめられる。しかし、江戸期の『論語』の普及を支えた初学者向けの多数の書に関する研究は言及されていない。

『論語徵渙』に関する研究成果としては、笠井助治氏の著作に言及がある。氏は『近世藩校に於ける学統学派の研究』下において、「初学者がその淵源を探求するに不便なため、その字句を摘抄して考注敷衍し、研修の便を図ったもの」⁽³⁾と

言及し、対象読者層を「初学者」とする。また、『新集四書註解群書提要附古今四書總目』⁽⁴⁾にも同様に立項があるが、簡易な解説にとどまる。なお、その書には対象読者層に関しては明記されない。

また、「江戸期『論語』訓蒙書」全体に関する研究成果では、石本道明氏「江戸期『論語訓蒙書』の概念と範囲」⁽⁵⁾がある。そこでは、「初学者向けとされる『論語』群書」とした上で、訓蒙書の分類がなされる。それは、以下のような分類である。

I 類 獨習参考書

《(a) 初学者を対象とするもの》

「初學時期の入門書として機能する著作」

《(b) 篤学者を対象とするもの》

「入門期を経て、より深い解釋や理解を求める向學者に對しての著作」

II 類 普及注釈書

「『四書集注』・『四書大全』等の再注釋書で、各學派の網羅的總覽の性格を持つ。主に初學の時期を脱した進級者用、また「講求之資」つまり教授用指導書として機能も持たされていた」

III 類 工具書

「本注理解の一助となる辭書類を主とし、本篇に付録として収録されているものから、單行のものもある。内容は、解題解説・術語語彙辭典・人物解説・助字解説・年表・地圖・参考書で、現代の『便覽』へと系譜がつながる」

以上のように分類される。本稿では、この分類に従い、「『論語』訓蒙書」の観点から、中根鳳河『論語徴渙』の実態及び価値を論じたい⁽⁶⁾。

3、『論語徴渙』書誌

まずは、『論語徴渙』の書誌を確認する。下記に示す。

【書名】『論語徴渙』甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸

『論語徴解』（題簽名）乾・坤 二冊

【書誌】[板行年] 寶歴十二年（一七六二）

[出版地] 京都 寺町通松原下

[書肆] 菊屋喜兵衛梓

[序文] 序文は二点存在する。「寶曆庚辰仲冬 彦根儒官伏水龍公美書于芍藥園東軒」(「論語徵解序」) 庚辰は寶曆十年(一七六〇)「寶曆壬午春三月美濃武欽繇撰」(「論語徵渙序」) 壬午は寶曆十二年(一七六二)〈原文に訓点・句読点あり〉。

[跋文] 跋文は二点存在する。「寶曆十年秋七月 長門曾原題 三野北春倫書」(「論語徵渙跋」)「寶曆壬午上巳 岐阜武元翔謹撰」(「跋」) 壬午は寶曆十二年(一七六二)〈原文に訓点・句読点あり〉。

【撰者】[名号] 中根鳳河、名は之紀、字は伯綱。鳳河は号。

[生没年] 享保二十年(一七三五)一寛政九年(一七九七)

[著作] 『論語徵渙』二冊の他に、『論語徵約辨解』一卷(板行不詳)などが存在する。

この表より、書名は『論語徵渙』である。しかし題簽名は『論語徵解』とされる。板行年は、寶曆十二年(一七六二)であるため、江戸期に作成された書物である。序文、跋文ともに二点ずつ存在する。撰者は、中根鳳河である。

次項では、撰者中根鳳河について、詳述する。

4、中根鳳河小傳

本項では、中根鳳河の事蹟について述べる。『近江人物志』⁽⁷⁾に小伝がある。下記に引用する。

鳳河は膳所藩の儒臣なり。名は之紀 字は伯綱。夙に心を経字に潜め特に徂徠の學風を懐ひ造詣深し。寶曆二年初めて藩に出仕して天明元年に至るまで中老として匡救の道に従ひ、衆能く之に感ぜり。會々讒譏に遇ひて禁錮せらるゝこと十有六年、漸く赦を受けて僅に一年、寛政九年十月廿九日、病んで歿す、年六十三なり。著はす所、論語徵解二卷あり。

この言説によれば、中根鳳河は、名は之紀、字は伯綱。鳳河は号。享保二〇年

～寛政九年（一七三五～一七九七）まで生存する。身分は、膳所藩（現在の滋賀県大津市）の儒臣である。そして、彼は、荻生徂徠（以下、徂徠と略称する）の学風に憧れを抱き、徂徠学に対して深い知識を持ち精通する人物である。

ここで問題となるのは、『論語微渙』を撰じた中根鳳河が『論語微』撰者である徂徠に直接師事したかどうかである。徂徠の生没年に関して、『儒林源林』によると、「享保戊申[十三年]正月十九日 六十有三才卒す(享保戊申[十三年] 正月十九日六十有三才卒)」⁽⁸⁾とある。つまり、徂徠は、寛文六年～享保一三年（一六六六～一七二八）まで生存した人物である。とするならば、中根鳳河と徂徠との生没年に鑑みるに、両者が固より出会うはずがないのである。したがって、中根鳳河が徂徠に「師事」と捉えるよりも、「私淑」と捉える方が穏当である。

5、本書の対象読者層

では、中根鳳河は、誰を読者対象として本書を書き記したのであろうか。その対象読者層に関しては、伏水龍公による序文に記述される。下記に引用する。

文字奇古一、有根據。故幼學之士或苦叵考索焉。友人膳所世臣中根伯綱素好學之人也。宦暇喜讀斯書、乃采拾典故、抄述一書。

文字奇古にして一、根據有り。故に幼學の士或いは苦だ考索し叵し。友人の膳所の世臣の中根伯綱は素より好學の人なり。宦ふる暇にして喜みて斯の書を読み、乃ち典故を采拾し、一書を抄述す。

[書き下し・句読点は柴崎附、以下同じ]

同序によると、本書は『論語微』が「幼學之士」には「苦叵考索」（典故を考えたずねることが難しい）であるため、中根鳳河が政務の余暇に、『論語微』を愛読し、逐一典故をたずねて記したものである。つまり、対象読者層は「幼學之士」である。換言すれば、ある程度の知識を備えるが、『論語微』においては初学者である状態の人を対象とするのであろう。

とするならば、本書における対象読者層は「初学者」を想定するため、訓蒙的要素があると言えるであろう。

次項では、書名の由来について言及する。

6、書名の由来

書名の由来に関して、北春倫による跋文に記述される。下記に引用する。

膳所人中根伯綱讀論語微也久矣。一と窮其源輯録為卷。於是向者不可知者、渙然氷釋。因名曰論語微渙。

膳所の人 中根伯綱は論語微を読むや久し。一と其の源を窮め輯録して巻と為す。是に於いて向者に知るべからざる者、渙然として氷釋す。因りて名を論語微渙と曰ふ。

この言説によれば、中根鳳河が『論語微』の語句の淵源を逐一探求した上で書物とした。それにより、以前に理解できなかったところが「渙然氷釋」（氷が溶けてあとに何も残らないように、疑問や疑惑がなくなる）できるようになった。そのため、『論語微渙』との書名となった。

つまり、書名の由来を辿ると、板行の目的として『論語微』の理解の一助として機能するために『論語微渙』を作成されたとひとまず言えそうである。また、本注理解の一助とする機能をかりに有するのであれば、訓蒙的要素があると言えるだろう。

次項では、『論語微渙』の体裁を確認する。

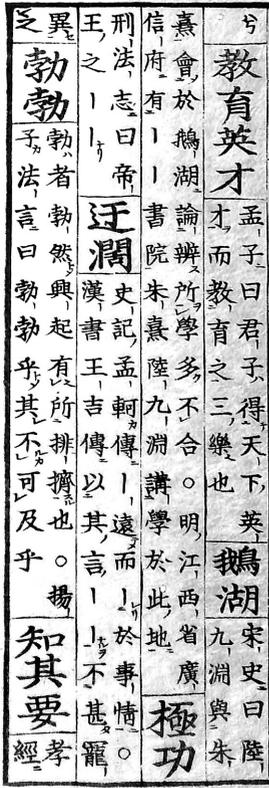
7、『論語微渙』の特徴について

7-1 『論語微渙』の体裁

本書の体裁は、『論語微』の語句を摘註し、出典・用例・語義を割注漢文体で掲出する。ここでは、本書冒頭の「學而」を用いて確認する(写真1)。なお、本書は「論語微渙甲」に始まり、「論語微渙癸」に終わる。このように十干に従った表記である。

写真①は、本書冒頭の「學而」である。写真①には、「鵝湖」の語句がある。翻刻すると次頁の通りである。

「鵝湖」は中根鳳河が『論語微』（學而第一「學而章」）の「宜其生鵝湖之爭也（宜なり其の鵝湖の争ひを生ぜしこと）」⁽⁹⁾より採録したものであろう。本書では、



鵝湖「宋史」曰陸九淵與朱熹會於鵝湖論辨所
 學多不_レ合○明江西省廣信府有_二書院_一朱熹
 陸九淵講學於此地_二

〔論語微渙〕甲「學而」(「」は柴崎附、以下同)

勃勃「勃ハ者勃然ト興起有_レ所_二排擠_一也○揚子_レ法言_二
 曰勃勃乎_ト其_レ不_レ可_レ及乎_一」

〔論語微渙〕甲「學而」

写真1：『論語微渙』「學而」

「宋史曰」以下に出処を示し、その後に「明江西」以下に説明がなされる。地名の説明では、『明一通志』を使用していると考えられる。また、同写真に「勃勃」の語がある。上記に翻刻する。

「勃勃」は中根鳳河が『論語微』(學而第一「其爲人也孝悌章」)の「辟諸草木之生、勃勃乎莫之能禦。故曰道生(諸を草木の生ずる、勃勃乎として之を能く禦ぐこと莫きに辟ふ。故に道生ずと曰ふ)」⁽¹⁰⁾より採録したものであろう。本書では、「勃者」以下に語義を示し、その後に「揚子法言曰」以下に類似する用例が説明される。

したがって、本書は、『論語微』の語句を摘註した上で、出典・用例・語義を割注漢文体で掲出する体裁であると言えよう。しかし、『論語微』全文の語句は網羅されない。そのため、採録された語句には何らかの基準が存在するはずだが現時点では不明である。

7-2 「一」(堅棒)の附し方やルビの有無

また、本書の特徴として、「一」(堅棒)の附し方やルビも挙げられる。ここでは、本書冒頭の「學而」を用いて確認する(写真2)。

本書冒頭の「學而」である。写真2には、「豪傑」の語句がある。翻刻すると次の通りである。

これは、中根鳳河が『論語微』(「題言」)の「豪傑士厚自對殖(豪傑の士厚く自ら對殖す)」⁽¹¹⁾より採録したものであろう。本書では、「豪傑」の語句の注に、「孟子」がある。その熟語には「一」(堅棒)が添えられる。この「一」の位置を見ると、「孟子」の「一」は音読みの熟語のため、右堅棒が附される。しかし、「所謂」の「一」は訓読みの熟語であるため、左堅棒が附される。つまり、それは、「所謂」を「しよい」と読まず「いはゆる」と読むという読み方の理解を「幼學之士」に教唆する機能を有する。なお、「一」は本書において一貫した体裁である。

また、同様に写真2には「潛心」の語句がある。翻刻すると次の通りである。

<p>蘭亭記曰今日潛心 之迹明復陳矣</p>	<p>是陳迹也 晉書劉恢傳曰侯仰之聞以爲陳迹也</p>	<p>孟子曰所謂封殖 厚也長也又襄公曰樹注云</p>	<p>身通者七醇真 純粹學官 漢書劉歆傳曰廣立</p>	<p>士全集 然 七十子 孟子曰如孔子之服業</p>	<p>緒言 此君長遊化爲異物 而論蘊而莫傳曰繫屬</p>	<p>論語微渙甲</p>	<p>日本 淡海膳所 中根紀 著</p>	<p>豪傑「孟子曰所謂一ノ之士也」 〔論語微渙〕甲〔學而〕</p>	<p>潛心「楊子法言曰顏子一ノ孔子」 〔論語微渙〕甲〔學而〕</p>
----------------------------	---------------------------------	--------------------------------	-------------------------------------	--	--------------------------------------	--------------	----------------------	---------------------------------------	--

写真2：『論語微渙』「學而」

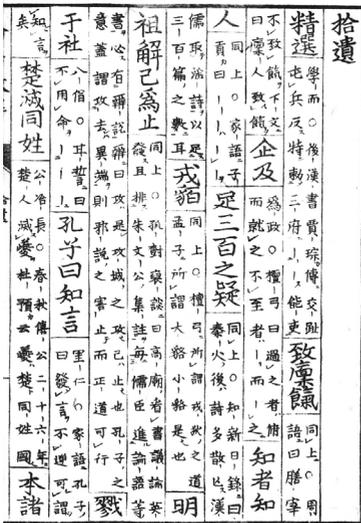


写真3：『論語徵渙拾遺』

要について言及する。

9、巻末に附された広告

本書における読者の需要を示す資料として、巻末に附された広告が挙げられる。それが次の写真4である。

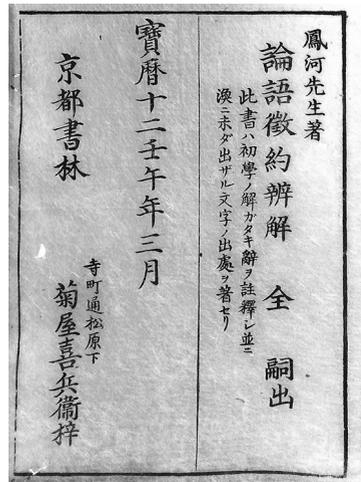


写真4：『論語徵渙』広告

【翻刻】
 鳳河先生著
 論語徵約辨解 全 嗣出
 此書ハ初學ノ解ガタキ辭ヲ註釋
 シ並ニ渙ニ未ダ出ザル文字ノ出
 處ヲ著セリ
 (『論語徵渙』廣告)

ここでは、『論語微約辨解』が「嗣出」される旨が記される。そこには「此書ハ初學ノ解ガタキ辭ヲ註釋シ並ニ渙ニ未ダ出ザル文字ノ出處ヲ著セリ」とある。これは、中根鳳河が両書に一貫して「初学者向け」の意識を有し著述したのであろう。また、「嗣出」であるならば、このような著作は、当時の読者から需要があった書だといえる。このような点からも、訓蒙書の要素が垣間見られる。

以上、『論語微渙』の体裁、「一」（堅棒）の附し方やルビの有無、他の朱熹『論語集注』などの別説は掲出していない態度などの特徴について論じた。考察の結果、『論語微渙』は、対象読者層である「幼學之士」を意識している。つまり、本註理解を助ける機能を有する書だといえるであろう。また、非常に高度な注釈書である『論語微』においてまでもその普及や理解を目的とする著作が存在すると分かった。なお、先行研究概観に示した石本道明先生の分類に従えば、「I類 獨習参考書《(a) 初学者を対象とするもの》》に相当する。それは独習を可能とし、本註理解を助ける機能を持つのである。

続いて、『論語微』の性質と『論語微渙』との関係についても考察を加えたい。

10、『論語微』の性質と『論語微渙』との関係

そもそも、荻生徂徠はなぜ「古文辞」を古経に利用したのか。この点に関しては、小川環樹氏の言及がある。次に引用する。

徂徠は「古文辞の学」を経書の研究に応用した。経書の言語は「古言」、古代の言語であって、後世の言語「今言」とは違う。ゆえに「古言」を知って始めて、経書に記してある「道」（すなわち「先王の道」「聖人の道」）を正確に知ることができる。⁽¹³⁾

（『荻生徂徠全集 第四巻』 七二六頁）

この言説によれば、徂徠が「古文辞の学」を経書の研究に応用したのは、「今言」とは異なる古代の言語「古言」を知ることにより、「道」（すなわち「先王の道」「聖人の道」）を正確に知ることが可能になるためである。また、この研究手法は、『論語』においても有用だと徂徠は考えていたようである。『論語微』「題言」に「余學古文辭十年、稍稍知有古言。古言明而後古義定、先王之道可得而言已（余 古文

辭を學ぶこと十年、稍稍にして古言有るを知る。古言明らかにして後に古義定まり、先王の道 得て言ふべきのみ」⁽¹⁴⁾とあるのがその証左である。なお、『論語徴』の「徴」とは「題言」にあるように「徴古言」⁽¹⁵⁾から採られた。すなわち古言に解釈の根拠を求めた書といえる。つまり、『論語』以前の古代の文言を踏まえ、『論語』の章句の内容を確定するのである。実際、『論語徴』には多くの古代の文献が引用される。したがって、『論語徴』の大きな特長としては、古代文献に根拠を求めた点が挙げられよう。

例として、「其爲人也孝弟」章（『論語』学而第一）を挙げる。以下に引用する⁽¹⁶⁾。

【經文】

有子曰、其爲人也孝弟、而好犯上者鮮矣。不好犯上、而好作亂者、未之有也。君子務本、本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與。⁽¹⁷⁾

有子曰はく、其の人と爲りや孝弟にして、上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すことを好まずして、亂を作すことを好む者は、未だ之れ有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝弟は、其れ仁の本と爲るか。

【注】

君子務本、本立而道生。蓋古語、有子引之……本始也。林放問禮之本、天下之本國也。國之本家也。家之本身也。德者本也。財者末也。皆謂所始。古言爲爾。⁽¹⁸⁾

君子は本を務む、本立ちて道生ずとは、蓋し古語、有子 之を引く……本は始めなり。林放 禮の本を問ふ、天下の本は國なり。國の本は家なり。家の本は身なり。徳なる者は本なり。財なる者は末なり。皆始むる所を謂ふ。古言爾りと爲す。

（書き下し、……、□は柴崎附）

この言説は、「君子務本、本立而道生（君子は本を務む、本立ちて道生ず）」が古語だと示すと同時に、「本」の古義を証明する注である。結論から言えば、徂徠は「本」を「本（はじめ）」とする。この典拠となるのが、「天下之本國也。國之本家也。家之本身也（天下の本は國なり。國の本は家なり。家の本は身なり）」という『孟子』の言説である。ただ、徂徠の注では、「～曰」などと文献名が明記されないことも多い。

そこで、『論語微渙』では、左記に示す写真5のように、「天下之本國」を掲出し、「孟子离婁」という注を付ける。

以上のことを踏まえれば、徂徠は当然ながら、『孟子』「离婁篇」に存在する言説であるのを前提に、「天下之本國也。國之本家也。家之本身也」を記載したに違いない。

しかし、『論語微』内において、それが『孟子』の言説かどうかの確証は得られない。つまり、『論語微』には、引用された古代文献の典拠の不確かさが問題として残る。そこで、中根鳳河は、『論語微』の問題を解決し補強する必要性があると考え、出典考証を行なったのではないだろうか。

そもそも『論語微』は、『論語』以前の古代の文献を引用することで、『論語』の章句の内容を確定する著作である。それを前提とすれば、残る問題点は、古代文献の典拠の不確かさであろう。この著作を確かなものへと昇華するには、出典考証をせざるを得ないのである。

したがって、『論語微渙』は、『論語微』に残る問題を解決し補強するための書であった可能性が示唆される。また、徂徠の提唱した「気質不変化」論もこの論証を裏付ける資料となり得るであろう。

次項では「気質不変化」論に関して言及する。

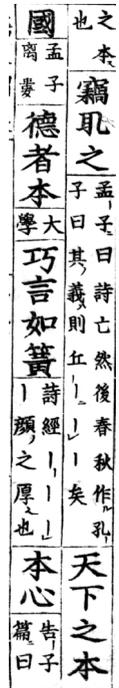


写真5

11、荻生徂徠の「気質不変化」論

徂徠の「気質不変化」論に触れる。「気質不変化」論に関して、『徂徠先生問答書』に端的に言及される。次に引用する。

氣質は 天より稟得。父母よりうみ付候事に候。氣質を变化すると申し候事は。宋儒の妄説にてならぬ事を人に責候無理之至に候。氣質は何としても变化はならぬ物にて候。米はいつ迄も米。豆はいつまでも豆にて候。只氣質を養ひ候て。其生れ得たる通りを成就いたし候が学問にて候。たとへば 米にても豆にても。その天性のままに実いりよく候様にこやしを致したて候ごとくに候。……されば世界の為にも。米にて用に立ち。豆は豆にて用に立申

候。宋儒之説のごとく氣質を変化して渾然中和に成候はば。米ともつかず豆ともつかぬ物に成たきとの事に候や。それは何之用にも立申間敷候。……⁽¹⁹⁾

この言説によると、天から氣質が与えられ、人は米や豆のような違った氣質を持つ存在である。氣質変化は宋儒の妄説であるから、米は米、豆は豆、それぞれの氣質を養うのである。そうすれば、米は米で、豆は豆で役に立てる。宋儒の説(氣質変化)で氣質を変化させてしまえば、米なのか、豆なのか分からない存在となる。その存在は何の役にも立たない、とする。

つまり、荻生徂徠は宋儒の説(氣質変化)を排撃する立場を取り、愚民の教化に消極的であったことが看取できる。とするならば、訓蒙書が徂徠学に存在するという事実、疑問を抱かざるを得ないだろう。10、『論語徴』の性質と『論語徴渙』との関係で論じた内容とを加味して考えれば、『論語徴渙』は、訓蒙書の側面よりも、『論語徴』の問題を解決し補強した側面の方が強い著作である。

したがって、『論語徴渙』は、第一義的には『論語徴』の問題を解決し補強した著作である。しかし一方で、「幼學之士」を対象とする訓蒙書としての側面も持ち合わせた著作であると見るべきではないか。

以上で本稿における検討を終える。

12、結論と今後の展望

本稿は「『論語』訓蒙書」の対象・特徴・評価を検討する一端として、中根鳳河『論語徴渙』を取り上げ、その書の実態及び価値を検討した。以下、本稿において述べた事柄についてを確認する。

第一に、対象読者層と板行目的である。『論語徴渙』の対象読者層は「幼學之士」、板行目的は、書名の由来を思慮すれば、『論語徴』の理解の一助のためである。

第二に、特徴である。『論語徴渙』の体裁、「一」(堅棒)の附し方やルビの有無、他の朱熹『論語集注』などの別説は掲出していない態度などに特徴が見られた。これは総じて、初学者に対する訓蒙的配慮が看取された。なお、2、先行研究概観に示した石本道明先生の分類に従えば、「I類 獨習参考書《(a) 初学者を対象とするもの》」に該当する。つまり、『論語徴』は、獨習を可能とし、本註理解を助

ける機能を持つ訓蒙書である。

しかしながら、『論語徴』の性質と『論語徴渙』との関係や「気質不変化」論などを加味すると、『論語徴渙』は、『論語徴』に残されたという問題を解決し補強した側面の方が強い著作といえよう。

したがって、『論語徴渙』は、第一義的には『論語徴』に残された問題である引用された古代文献の典拠の不確かさを解決し補強した著作である。しかし一方で、「幼學之士」を対象とする訓蒙書としての側面も持ち合わせていた著作でもあると考えられる。

今後の展望として、『論語徴渙』の独自性を見出すには、前時代、同時代に板行された書と比較する必要がある。なお、『論語徴』に関する書が他にあるならば、調査を要する。全て今後の課題としたい。

注

- (1) 使用した底本は、寶曆十二年（一七六二）板行本である。
- (2) 高山大毅氏「二一世紀の徂徠学」（『思想』第一二號 岩波書店 二〇一六年）
- (3) 笠井助治氏『近世藩校に於ける学統学派の研究』下（吉川弘文館・一九七〇年・八二二頁）
- (4) 国立編譯館『新集四書註解群書提要附古今四書總目』（泰文文化事業股份有限公司・二〇〇〇年・九四二頁）
- (5) 石本道明先生「江戸期『論語訓蒙書』の概念と範囲（『江戸期『論語』訓蒙書の研究-第一集-』）」（國學院大學大学院・二〇一八・所収・二頁）
- (6) なお、江戸期『論語』訓蒙書全体に対する先行研究への言及は、中山ひかり氏「江戸期『論語』訓蒙書先行研究概観（『江戸期『論語』訓蒙書の研究-第二集-』）」（國學院大學大学院・二〇二〇 所収・四一頁～四〇頁）がある。氏は「江戸期『論語』訓蒙書」研究の着想にあたり大きな気づきを促した先行研究を四点に大別する。第一に、各文献に関する成果である。第二に、直接「江戸期『論語』訓蒙書」を主軸とはしていないが「江戸期『論語』訓蒙書」に関連する内容を含む研究成果である。第三に、特定の研究分野における「訓蒙書」への言及である。第四に崎門学への言及を主眼とする研究成果である。この氏の指摘は、群体としての「訓蒙書」の存在を示唆する言及であると考えられる。
- (7) 滋賀縣教育會 編輯『近江人物志』（文泉堂・一九一七年・五〇八～五〇九頁）
- (8) 西島醇氏『儒林源林』（東洋圖書刊行會・一九三四年・一六三頁）
- (9) 小川環樹編『荻生徂徠全集』三卷（みすず書房・一九七七・一九頁）以下、『論語徴』三卷の引用は本書に従う。なお、書き下し文は参考とし、筆者が一部改めた箇所がある。
- (10) 『論語徴』第三卷（二〇頁）
- (11) 『論語徴』第三卷（三頁）
- (12) 『論語徴』第三卷（三頁）
- (13) 小川環樹編『荻生徂徠全集』第四卷（みすず書房・一九七八年・七二六頁）以下、『論語徴』四卷の引用は本書に従う。なお、書き下し文は参考とし、筆者が一部改めた箇所がある。

- (14) 『論語徴』第三卷(四頁)
- (15) 『論語徴』第三卷(四頁)
- (16) 『論語徴』には経文が掲出されないため、『論語集注』(『四書章句集注』所収『論語集注』新編諸子集成 中華書局 一九八三年)から引用した。以下、『論語集注』の引用は本書に従う。
- (17) 『論語集注』(四八頁)
- (18) 『論語徴』(二〇頁)
- (19) 『徂徠先生問答書』(島田虔次編輯『荻生徂徠全集』1巻所収・みすず書房・一九七三年・四五六～四五七頁)